

## 勉強会レポート：若者と地域を結ぶインターンシップ10年～

### 「地域づくりインターンの会」の事例から学ぶ

【日時】	2010年8月7日
【場所】	高知大学国際・地域連携センター セミナー室
【参加者】	13人
【問題提供者】	関司直也氏

#### ■関司直也氏

▼地域づくりインターンの会に関わるようになった経緯を、自己紹介を通して語ってもらった。

\*初めて地域に入ったのは大学1年の時、上級生の地域調査に同行する誘いをうけたことから。調査で入った熊本県小国町は1985年くらいから林業での里作りをしており、「この町はなぜ元気なのか」を調査することに。調査では一軒一軒アンケート調査のお願いをしてまわった。最後の町民報告会で、学生をつたない発表でも地域の人たちが熱心に聞いてくれたことに感動した。ここから小国町とのつながりができた。

\*1996年から国による移住促進目的の地域インターンシップ事業が2年間試行された。三大都市圏の学生を対象とし、10地域ほどが参加した。2年で終わった国の実験事業を受けて、意識の高い学生が助成金をとり2000年に「地域づくりインターンの会」を立ちあげた。

\*国の事業は対称学生を都市圏以外にも広げて再開したが、色々と制約があった。「地域づくりインターンの会」は、地域と学生で継続できる方法を考え、助成金は交通費補助として使用、各地方自治体に成果を提出するのを基本に、首都圏の学生を地方に送り出す仕組みを作った。

▼「地域づくりインターンの会」の活動について説明をしてもらった。

\*1年サイクルの活動

4～5月は説明会を行い、エントリー。

6月に1泊2日の派遣地決定会を行っている。マッチングこそ大事だと位置付けており、地域の人たちにも参加してもらっている。地域プレゼン後は学生が各ブースを一巡し一晩かけてじっくり話し込む。翌日、学生に第三希望までを出してもらって、事務局と地域の

人たちで調整を行う。希望に添わなければ辞退も可能にしているが、今のところ辞退はない。

7月は全体勉強会。地域に入る事前準備のセミナーなどを開催している。

8月、各地に派遣。

9月に懇談会を開き、フィードバック。

11月は全体報告会で、また関係者全員が集まる。

12月～3月にかけて、『たびぼうず』という報告書が学生たちによって作られる。

#### \*会の特徴

インターン経験による6～7人の学生が事務局を運営している。

顔の見える関係づくりをしている。派遣地決定会や勉強会、報告会などを設定することで、地域と学生、地域と地域、学生と学生の関係が作られる。

地域も学生もお互いが金銭的負担をしている。会費として、地域は10万円、学生は5000円を負担し、運営を支えている。

\*受け入れ地域の戦略を、P D C Aサイクルに照らして分析を行った。

Plan(提案)=インターン生に地域課題の解決策を提案させる

DO(体験)=インターン生に地域を体験させる

CHECK(評価)=インターン生に地域課題を発見させる

Act(改善)=インターン生に地域課題に直接関わる場を与える

課題を図に落とすとP D C Aサイクルをぐるぐる回っているように見えるが、横から見れば波を描きながらも螺旋状に上昇している。学生と地域のそれぞれのお互いの「強み」を活かし「弱み」をカバーし合う関係ができており、さらによくしていけるのではないかと。

#### \*効果

学生らしい若者の視点から、情報・資源が得られる。地域側の視点を持つ都市住民を育てることにつながる。

学びあう関係づくりができる。地域にとっても学びのチャンス。

学生による活動との連携が生まれる。

#### \*課題

長期的な事業成果が見えにくい。

## \*最近の傾向

参加学生が増えて多様化してきた。農山村への抵抗感が薄れてきている。

継続して地域と関わるのが薄くなってきた。1回で満足してしまう。参加の幅が広がったことにもよる。

現地でのトラブルを見ると、学生のコミュニケーション能力の低下がある。

過疎化、受け入れ疲れもあり、受け入れ地域の展開力の後退がある。

授業でインターンに来る学生も出てきて、モチベーションが違う。

OG、OBの活用をしようという動きがある。

\*学生による会なので、「やる気がなくなったら閉じる」でいいのでは、と考えている。

## ■一問一答

今年から地域づくりインターンに取り組もうとしている参加者が多く、積極的に質問が出てきた。その中から高知でも参考になると思われるものをいくつかあげてみる。

Q 過疎化が進んでいるので定住につなげられたらと考える。定住した事例は？

A インターンが定住促進に対して即効性はないと思う。人的な地域支援制度などが近年増えている、期間限定の地域支援の仕事に就いて、その後地域側から声をかけられて定住する人もいる。

Q 交流人口を増やす方策は

A 「逆インターン」が発生した。婦人会の東京見物のガイドを依頼されるなど、地域から学生を訪問する事も。また、学生の友達や親が関心を持ち、新しい交流が生まれることもあった。

Q 地域は高齢化による福祉や自立支援が喫緊の課題。若者活用の地域づくりだと、双方のニーズのずれが大きくなっているのではないか。

A コーディネーターの構え方としては、よく話を聞き丁寧に地域の状況を把握することからはじめるべき。活性化するんだと突っ走ると、足元すくわれてしまう。地域にとって何が一番かについて学生が考えなくなる、思考停止してしまうことが危険。

Q 受入地域として現在プログラムを作成中。学生が主体的に取り組んでもらえるためにはどう準備したらいいか？

A 学生が消化不良にならないように、スケジュールは余裕をもつといい。2週間プログラムだと最初の1週間でなんとなくわかって、提案がまとまる前に時間切れになりそう。顔合わせツアーや、事前課題の設定も有効か。成果を期待しすぎず、交流の機会を多めにする。学生は「地域のため」というより、出会った「あの人のため」に考えるとリアリティが増す。課題持ち帰りで報告会までにまとめる、もあり。

Q コーディネーターとして気をつけるべきことは？

A どんな学生が化けるのかどんな方向性になるかは無限大の可能性はある。可能性は排除せず、一人ひとり丁寧に。ミスマッチはどうしても発生してしまうので仕方ない、後々ていねいにフォローする対応を。

Q コーディネート費用の負担について、理解を得るためにどうしたらいいか。

A 地域づくりインターンの会では会費をストックして、学生にも地域にも交通費として一部キャッシュバックされるのでコーディネート料という意識はあまりない。インターンシップ全体の仕組みとして「こういう人が支えている」ことがわかれば意識が変わるのでは。会では、派遣地決定会時に年次総会を行い、インターン学生にも決算資料を配りオープンにしている。

Q OBOGの関わり方は？

A 報告会・マッチングに顔を出し、自分の体験を語ることで協力している。事務局から昔の話を聞かせてほしいと連絡があることも。

Q 高知にある人と地域の研究所だからできることは？

A 地域と近いので交流しやすいことを強みにできる。ツアーの開催など、地域側から学生へのアプローチもしやすい。

「ふるさとインターンシップ」事業のモデルにもなる「地域づくりインターンの会」の立ち上げメンバーであった岡司先生のお話を生で聞ける機会とあって、今年高知でインターンシップ事業に携わる高知県の担当職員、地域の方々など、多くの参加者が集まりました。質問も多く飛び交い、研究所スタッフにとっては非常に身に入る勉強会になりました。

(文責・木谷)